# 燈明之巻

泉鏡花

# 一

「やあ、やまかがしや蝮が居るぞう、あっけえやつだ、気をつけさっせえ。」

「ええ。」

何と、足許の草へ鎌首が出たように、立すくみになったのは、薩摩絣の単衣、藍鼠無地の絽の羽織で、身軽に出立った、都会かららしい、旅の客。——近頃は、東京でも地方でも、まだ時季が早いのに、慌てもののせいか、それとも値段が安いためか、道中の晴の麦稈帽。これが真新しいので、ざっと、年よりは少く見える、

そのかわりどことなく人体（にんてい）に貫目のないのが、吃驚（びっくり）した息もつかず、声を継いで、

「驚いたなあ、蝮は弱ったなあ。」

と帽子の鍔（つば）を——薄曇りで、空は一面に陰気なかわりに、まぶしくない——仰向（あおむ）けに崖（がけ）の上を仰いで、いま野良声を放った、崖縁にのそりと突立（つった）つ、七十余りの爺（じい）さんを視（み）ながら、蝮は弱ったな、と弱った。が、実は蛇ばかりか、蜥蜴（とかげ）でも百足（むかで）でも、怯（おび）えそうな、据（すわ）らない腰つきで、

「大変だ、によろによろ居るかーい。」

「はああ、あアに、そんなでもねえがなし、ちょくちょ

く、鎌首をつん出すでい、気をつけさっせるがよかんべでの。」

「お爺さん、おい、お爺さん。」

「あんだなし。」

と、谷へ返答だまを打込(ぶちこ)みながら、鼻から煙を吹上げる。

「煙草銭(たばこせん)ぐらい心得るよ、煙草銭を。だからここまで下りて来て、草生(くさっぱ)の中を連戻してくれないか。またこの荒墓(あれはか)……」

と云いかけて、

「その何だ。……上の寺の人だと、悪いんだが、まっ

たく、これは荒れているね。卵塔場へ、深入りはしないからよかったけれど、今のを聞いては、足がすくんで動かれないよ。」

「はははは。」

鼻のさきに漂(ただよ)う煙が、その頸窪(ぼんのくぼ)のあたりに、古寺の破廂(やれびさし)を、なめくじのように這(は)った。

「弱え人だあ。」

「頼むよ――こっちは名僧でも何でもないが、爺さん、爺さんを……導きの山の神と思うから。」

「はて、勿体(もったい)もねえ、とんだことを言うなっす。」

と両(ふた)つ提(さげ)の――もうこの頃では、山の爺が喫(の)む煙草

がバットで差支えないのだけれど、事実を報道する——根附(ねつけ)の処を、独鈷(とっこ)のように振りながら、煙管(きせる)を手弄(てなぶ)りつつ、ぶらりと降りたが、股引(ももひき)の足拵(あしごしら)えだし、腰達者に、ずかずか……と、もう寄った。

「いや、御苦労。」

と一基の石塔の前に立並んだ、双方、膝の隠れるほど草深い。

実際、この卵塔場は荒れていた。三方崩れかかった窪地の、どこが境というほどの杭(くい)一つあるのでなく、折朽(おれく)ちた古卒都婆(ふるそとば)は、黍殻(きびがら)同然に薙伏(なぎふ)して、薄暗いと白骨に紛れよう。石碑も、石塔も、倒れたり、のめっ

たり、台に据っているのはほとんどない。それさえ十ウの八つ九つまでは、ほとんど草がくれなる上に、積った落葉に埋(うも)れている。青芒(あおすすき)の茂った、葉越しの谷底の一方が、水田に開けて、遥々(はるばる)と連る山が、都に遠い雲の形で、蒼空(あおぞら)に、離れ島かと流れている。

割合に土が乾いていればこそで――昨日(きのう)は雨だったし――もし湿地だったら、蝮、やまかがしの警告がないまでも、うっかり一歩も入(い)れなかったであろう。

それでもこれだけ分入(わけい)るのさえ、樹の枝にも、卒都婆にも、苔(こけ)の露は深かった。……旅客の指の尖(さき)は草の汁に青く染まっている。雑樹(ぞうき)の影が沁(し)むのかも知れな

い。
蝙蝠（こうもり）が居そうな鼻の穴に、煙は残って、火皿に白くなった吸殻を、ふっふっと、爺は掌（てのひら）の皺（しわ）に吹落し、眉をしかめて、念のために、火の気のないのを目でためて、吹落すと、葉末にかかって、ぽすぽすと消える処を、もう一つ破草履（やれぞうり）で、ぐいと踏んで、
「ようござらっせえました、御参詣（ごさんけい）でがすかな。」
「さあ……」
と、妙な返事をする。
「南無（なむ）、南無、何かね、お前様、このお墓に所縁の方でがんすかなす。」

胡桃（くるみ）の根附を、紺小倉のくたびれた帯へ挟んで、踞（しゃが）んで掌を合せたので、旅客も引入れられたように、夏帽を取って立直った。

「所縁にも、無縁にも、お爺さん、少し墓らしい形の見えるのは、近間では、これ一つじゃあないか——それに、近い頃、参詣があったと見える、この線香の包紙のほぐれて残ったのを、草の中に覗（のぞ）いたものは、一つ家（や）の灯のように、誰だって、これを見当（みあて）に辿（たど）りつくだろうと思うよ。山路（やまみち）に行暮れたも同然じゃないか。」

碑の面（おもて）の戒名は、信士とも信女（しんにょ）とも、苔に埋れて見えないが、三つ蔦（づた）の紋所が、その葉の落ちたように寂

しく顕（あら）われて、線香の消残った台石に――田沢氏――
と仄（ほのか）に読まれた。
「は、は、修行者のように言わっしゃる、御遠方から
でがんすかの、東京からなす。」
「いや、今朝は松島から。」
と袖を組んで、さみしく言った。
「御風流でがんす、お楽（たのし）みでや。」
「いや、とんでもない……波は荒れるし。」
「おお。」
「雨は降るし。」
「ほう。」

「やっと、お天気になったのが、仙台からこっちでね、いや、馬鹿々々しく、皈って来た途中ですよ。」

成程、馬鹿々々しい……旅客は、小県、凡杯――と自称する俳人である。

この篇の作者は、別懇の間柄だから、かけかまいのない処を言おう。食い続きは、細々ながらどうにかしている。しかるべき学校は出たのだそうだが、ある会社の低い処を勤めていて、俳句は好きばかり、むしろ遊戯だ。処で、はじめは、凡俳、と名のったが、俳句を遊戯に扱うと、近来は誰も附合わない。第一なぐられかねない。見ずや、きみ、やかなの鋭き匕首をもっ

て、骨を削り、肉を裂いて、人性（じんせい）の機微を剔（ぬ）き、十七文字で、大自然の深奥（しんおう）を衝（つ）こうという意気込の、先輩ならびに友人に対して済まぬ。憚（はばか）り多い処から、「俳」を「杯」に改めた。が、一盞（いっさん）献ずるほどの、余裕も働きもないから、手酌で済ます、凡杯である。

それにしても、今時、奥の細道のあとを辿（たど）って、松島見物は、「凡」過ぎる。近ごろは、独逸（ドイツ）、仏蘭西（フランス）はつい隣りで、マルセイユ、ハンブルク、アビシニヤごときは津々浦々の中に数えられそうな勢（いきおい）。少し変った処といえば、獅子狩（ししがり）だの、虎狩だの、類人猿の色のもめ事などがほとんど毎月の雑誌に表われる……その皆

がみんな朝夷（あさひな）島めぐりや、おそれ山の地獄話でもないらしい。

最近も、私を、作者を訪ねて見えた、学校を出たばかりの若い人が、一月ばかり、つい御不沙汰（ごぶさた）、と手軽い処が、南洋の島々を渡って来た。……ピイ、チョコ、キイ、キコと鳴く、青い鳥だの、黄色な鳥だの、可愛らしい話もあったが、聞く内にハッと思ったのは、ある親島から支島（えだじま）へ、カヌウで渡った時、白熱の日の光に、藍（あい）の透通る、澄んで静かな波のひと処、たちまち濃い萌黄（もえぎ）に色が変った。微風も一繊雲もないのに、ゆらゆらとその潮が動くと、水面に近く、颯（さっ）と黄薔薇（きばら）の

あおりを打った。その大(おおき)さ、大洋の只中(ただなか)に計り知れぬが、巨大なる鱏(えい)の浮いたので、近々と嘲(あざ)けるような黄色な目、二丈にも余る青い口で、ニヤリとしてやがて沈んだ。海の魔宮の侍女であろう。その消えた後も、人の目の幻に、船の帆は少時(しばし)その萌黄の油を塗った。

……「畳で言いますと」――話し手の若い人は見まわしたが、作者の住居(すまい)にはあいにく八畳以上の座敷がない。「そうですね、三十畳、いやもっと五十畳、あるいはそれ以上かも知れなかったのです。」と言うのである。

半日隙(はんにちびま)とも言いたいほどの、旅の手軽さがこのくらいである処を、雨に降られた松島見物を、山の爺(じじい)に話

している、凡杯の談話ごときを——読者諸賢——しかし、しばらくこれを聴け。

## 二

小県凡杯は、はじめて旅をした松島で、着いた晩と、あくる日を降籠(ふりこ)められた。景色は雨に埋(うず)もれて、竈(かまど)にくべた生薪(なままき)のいぶったような心地がする。屋根の下の観光は、瑞巌寺(ずいがんじ)の大将、しかも眇(かため)に睨(にら)まれたくらいのもので、何のために奥州へ出向いたのか分らない。日も、懐中(ふところ)も、切詰めた都合があるから、三日めの朝、

旅籠屋（はたごや）を出て立つと、途中から、からりとした上天気。

奥羽線の松島へ戻る途中、あの筋には妙に豆府屋が多い……と聞く。その油揚が陽炎（かげろう）を軒に立てて、豆府のような白い雲が蒼空（あおぞら）に舞っていた。

おかしな思出はそれぐらいで、白河近くなるにつれて、東京から来がけには、同じ処で夜（よ）がふけて、やっぱりざんざ降（ぶり）だった、雨の停車場（ステエション）の出はずれに、薄ぼやけた、うどんの行燈（あんどう）。雨脚も白く、真盛（まっさか）りの卯（う）の花が波を打って、すぐの田畝（たんぼ）があたかも湖のように拡がって、蛙（かえる）の声が流れていた。これあるがためか、と思ったまで、雨の白河は懐しい。都をば霞とともに出

でしかど……一首を読むのに、あの洒落（しゃれ）ものの坊さんが、頭を天日に曝（さら）したというのを思出す……「意気な人だ。」とうっかり、あみ棚に預けた夏帽子の下で素頭（すこうべ）を敲（たた）くと、小県はひとりで浮（うっ）かり笑った。ちょっと駅へ下りてみたくなったのだそうである。

そこで、はじめて気がついたと云うのでは、まことに礼を失するに当る。が、ふとこの城下を離れた、片原というのは、渠（かれ）の祖先の墳墓の地である。

海も山も、斉（ひと）しく遠い。小県凡杯は——北国（ほっこく）の産で、父も母もその処の土となった。が、曾祖、祖父、祖母、なおその一族が、それか、あらぬか、あの雲、あの土

の下に眠った事を、昔話のように聞いていた。

——家は、もと川越（かわごえ）の藩士である。御存じ……と申出るほどの事もあるまい。石州浜田六万四千石……船つきの湊（みなと）を抱えて、内福の聞こえのあった松平某氏（なにがし）が、仔細（しさい）あって、ここの片原五万四千石、——遠僻（えんぺき）の荒地に国がえとなった。後に再び川越に転封（てんぽう）され、そのまま幕末に遭遇した、流転の間に落ちこぼれた一藩の人々の遺骨、残骸（ざんがい）が、草に倒れているのである。

心ばかりの手向（たむけ）をしよう。

不了簡（ふりょうけん）な、凡杯も、ここで、本名の銑吉（せんきち）となると、妙に心が更（あらた）まる。煤（すす）の面（つら）も洗おうし、土地の模様も

聞こうし……で、駅前の旅館へ便った。
「姉さん、風呂には及ばないが、顔が洗いたい。手水……何、洗面所を教えておくれ。それから、午飯を頼む。ざっとでいい。」
二階座敷で、遅めの午飯を認める間に、様子を聞くと、めざす場所――片原は、五里半、かれこれ六里遠い。――
鉄道はある、が地方のだし、大分時間が費るらしい。自動車の便はたやすく得られて、しかも、旅館の隣が自動車屋だと聞いたから、価値を聞くと、思いのほか廉であった。

「早速一台頼んでおくれ。……このちょっとしたものだが、荷物は預けて行きたいと思う。……成るべく、日暮までに帰って、すぐ東京へ立ちたいのだがね、時間の都合で遅くなったら一晩厄介になるとして――勘定はその時と――自動車は、ああ、成程隣りだ。では、世話なしだ、いや、お世話でした。」

表階子(おもてはしご)を下りかけて、

「ねえさん。」

「へい。」

「片原に、おっこち……こいつ、棚から牡丹餅(ぼたもち)ときこえるか。――恋人でもあったら言伝(ことづけ)を頼まれようか

ね。」

「いやだ、知りましねえよ、そんげなこと。」

「ああ、自動車屋さん、御苦労です。ところで、料金だが、間違はあるまいね。」

「はい。」

と恭(うやうや)しく帽を脱いだ、近頃は地方の方が夏帽になるのが早い。セルロイドの目金(めがね)を掛けている。

「ええ、大割引で勉強をしとるです。で、その、ちょっとあらかじめ御諒解を得ておきたいのですが、お客様が小人数(こにんず)で、車台が透いております場合は、途中、田舎道、あるいは農家から、便宜上、その同乗を求めら

るる客人がありますと、御迷惑を願う事になっているのでありますが。」

「ははあ、そんな事だろうと思った。どうもお値段の塩梅（あんばい）がね。」

　女中も帳場も皆笑った。

ロイドめがねを真円（まんまる）に、運転手は生真面目（きまじめ）で、

「多分の料金をお支払いの上、お客様がですな、一人で買切っておいでになりましても、途中、その同乗を求むるものをたって謝絶いたしますと、独占的ブルジョアの横暴ででもありますかのように、階級意識を刺戟しまして——土地が狭いもんですから——われわ

れをはじめ、お客様にも、敵意を持たれますというと、何かにつけて、不便宜、不利益であります処から。……は。」
「分りました、ごもっともです。」
「ですが、沿道は、全く人通りが少いのでして、乗合といってもめったにはありません。からして、お客様には、事実、御利益になっておりますのでして。」
「いや、損をしても構いません。妙齢（としごろ）の娘か、年増の別嬪（べっぴん）だと、かえってこっちから願いたいよ。」
「……運転手さん、こちらはね、片原へ恋人に逢いにいらっしゃったんだそうですから。」

しっぺい返しに、女中にトンと背中を一つ、くらわされて、そのはずみに、ひょいと乗った。元来おもみのある客ではない。

「へい御機嫌よう……お早く、お帰りにどうぞ。」

番頭の愛想を聞流しに乗って出た。

惜(おし)いかな、阿武隈(あぶくま)川の川筋は通らなかった。が、県道へ掛(かか)って、しばらくすると、道の左右は、一様に青葉して、梢(こずえ)が深く、枝が茂った。一里ゆき、二里ゆき、三里ゆき、思いのほか、田畑も見えず、ほとんど森林地帯を馳(はし)る。……

座席の青いのに、濃い緑が色を合わせて、日の光は、

ちらちらと銀の蝶の形して、影も翼も薄青い。

人（じん）、馬（ば）、時々飛々（とびとび）に数えるほどで、自動車の音は高く立ちながら、鳴く音（ね）はもとより、ともすると、驚いて飛ぶ鳥の羽音が聞こえた。

一二軒、また二三軒。山吹、さつきが、淡い紅（あか）に、薄い黄に、その背戸、垣根に咲くのが、森の中の夜（よ）があけかかるように目に映ると、同時に、そこに言合せたごとく、人影が顕（あら）われて、門（かど）に立ち、籬（まがき）に立つ。

村人よ、里人よ。その姿の、轍（わだち）の陰にかくれるのが、なごり惜（おし）いほど、道は次第に寂しい。

宿に外套（がいとう）を預けて来たのが、不用意だったと思うば

かり、小県は、幾度も襟を引合わせ、引合わせしたそうである。

　この森の中を行くような道は、起伏凹凸が少く、坦だった。がしかし、自動車の波動の自然に起るのが、波に揺らるるようで便りない。埃も起たず、雨のあとの樹立の下は、もちろん濡色が遥に通っていた。だから、偶に行逢う人も、その村の家も、ただ漂々蕩々として陰気な波に揺られて、あとへ、あとへ、漂って消えて行くから、峠の上下、並木の往来で、ゆき迎え、また立顧みる、旅人同士とは品かわって、世をかえても再び相逢うすべのないような心細さが身に沁み

たのであった。

かあ、かあ、かあ、かあ。

鈍くて、濁って、うら悲しく、明るいようで、もの陰気で。

「烏がなくなぁ。」

「群れておるです。」

運転手は何を思ったか、口笛を高く吹いて、

「首くくりでもなけりゃいいが、道端の枝に……いやだな。」

うっかり緩めた把手（ハンドル）に、衝（つ）と動きを掛けた時である。ものの二三町は瞬く間だ。あたかもその距離の前途（ゆくて）の

右側に、真赤（まっか）な人のなりがふらふらと立揚（たちあが）った。天象、地気、草木、この時に当って、人事に属する、赤いものと言えば、読者は直ちに田舎娘の姨（おば）見舞か、酌婦の道行振（みちゆきぶり）を瞳に描かるるであろう。いや、いや、そうでない。

そこに、就中（なかんずく）巨大なる杉の根に、揃って、踞（つくば）っていて、いま一度に立揚ったのであるが、ちらりと見た時は、下草をぬいて燃ゆる躑躅（つつじ）であろう――また人家がある、と可懐（なつか）しかった。

自動車がハタと留まって、窓を赤く蔽（おお）うまで、むくむくと人数（にんず）が立ちはだかった時も、斉（ひと）しく、躑躅の根

から湧上(わきあが)ったもののように思われた。五人——その四人は少年である。……とし十一二三ばかり。皆真赤なランニング襯衣(しゃつ)で、赤い運動帽子を被(かぶ)っている。彼等を率いた頭目らしいのは、独り、年配五十にも余るであろう。脊の高い瘠男(やせおとこ)の、おなじ毛糸の赤襯衣を着込んだのが、緋(ひ)の法衣(ころも)らしい、坊主袖の、ぶわぶわするのを上に絡(まと)って、脛(すね)を赤色の巻きゲエトル。赤革の靴を穿(は)き、あまつさえ、リボンでも飾った状(さま)に赤木綿の蔽(おおい)を掛け、赤い切(きれ)で、みしと包んだヘルメット帽を目深(まぶか)に被った。……

頤骨(あごぼね)が尖(とが)り、頬がこけ、無性髯(ぶしょうひげ)がざらざらと疎(あら)く黄

味を帯び、その蒼黒い面色の、鉤鼻が尖って、ツンと隆く、小鼻ばかり光沢があって蠟色に白い。眦が釣り、目が鋭く、血の筋が走って、そのヘルメット帽の深い下には、すべての形容について、角が生えていそうで不気味に見えた。

　この頭目、赤色の指導者が、無遠慮に自動車へ入ろうとして、ぎろりと我が銑吉を視て、胸さきで、ぎしと骨張った指を組んで合掌した……変だ。が、これが礼らしい。加うるに慇懃なる会釈だろう。けれども、この恭屈頂礼をされた方は――また勿論されるわけもないが――胸を引掻いて、腸でも挘るのに、引導を

渡されでもしたようで、腹へ風が徹（とお）って、ぞッとした。

すなわち、手を挙げるでもなし、声を掛けるでもなし、運転手に向ってもまた合掌した。そこで車を留めたが、勿論、拝む癖に傲然（ごうぜん）たる態度であったという。それもあとで聞いたので、小県がぞッとするまで、不思議に不快を感じたのも、赤い闖入者（ちんにゅうしゃ）が、再び合掌して席へ着き、近々と顔を合せてからの事であった。樹から湧こうが、葉から降ろうが、四人の赤い子供を連れた、その意匠、右の趣向の、ちんどん屋……と奥筋でも称（とな）うるかどうかは知らない、一種広告隊の、林道を穿（うが）って、赤五点、赤長短、赤大小、点々として顕わ

れたものであろう、と思ったと言うのである。
が、すぐその間違いが分った。客と、銃吉との間へ入って腰を掛けた、中でも、脊のひょろりと高い、色の白い美童だが、疳の虫のせいであろう、……優しい眉と、細い目の、ぴりぴりと昆虫の触角のごとく絶えず動くのが、何の級に属するか分らない、折って畳んだ、猟銃の赤なめしの袋に包んだのを肩に斜に掛けている。且つこれは、乗込もうとする車の外で、ほかの少年の手から受取って持替えたものであった。そうして、栗鼠が（註、この篇の談者、小県凡杯は、兎のように、と云ったのであるが、兎は私が贔屓だから、

栗鼠にしておく。）後脚で飛ぶごとく、嬉しそうに、刎ねっつ飛込んで、腰を掛けても、その、ぴょん、が留まないではずんでいた。

——後に、四童、一老が、自動車を辞し去った時は、ずんぐりとして、それは熊のように、色の真黒な子供が、手がわりに銃を受取ると斉しく、むくむく、もこもこと、踊躍して降りたのを思うと、一具の銃は、一行の名誉と、衿飾の、旗表であったらしい。

猟期は過ぎている。まさか、子供を使って、洋刀や空気銃の宣伝をするのではあるまい。

いずれ仔細があるであろう。

ロイドめがねの黒い柄を、耳の尖(さき)に、？のように、振向いて運転手が、

「どちらですか。」

「ええ処で降りるんじゃ。」

と威圧するごとくに答えながら、双手を挙げて子供等を制した。栗鼠ばかりでない。あと三個も、補助席二脚へ揉合(もみあ)って［＃「揉合(もみあ)って」は底本では「揉合(もみあ)つて」］乗ると斉(ひと)しく、肩を組む、頬を合わせる、耳を引張(ひっぱ)る、真赤(まっか)な洲浜形(すはまがた)に、鳥打帽を押合って騒いでいたから。戒(いましめ)は顕われ、しつけは見えた。いまその一弾指のもとに、子供等は、ひっそりとして、エンジンの音

立処に高く響くあるのみ。その静さは小県ただ一人の時よりも寂然とした。

なぜか息苦しい。

赤い客は咳一つしないのである。

小県は窓を開放って、立続けて巻莨を吹かした。

しかし、硝子を飛び、風に捲いて、うしろざまに、緑林に靡く煙は、我が単衣の紺のかすりになって散らずして、かえって一抹の赤気を孕んで、異類異形に乱れたのである。

「きみ、きみ、まだなかなかかい。」

「屋根が見えるでしょう――白壁が見えました。」

「留まれ。」

　その町の端頭（はずれ）と思う、林道の入口の右側の角に当る……人は棲（す）まぬらしい、壊屋（こわれや）の横羽目に、乾草（ほしくさ）、粗朶（そだ）が堆（うずたか）い。その上に、惜（お）しむべし杉の酒林（さかばやし）の落ちて転んだのが見える、傍（わき）がすぐ空地の、草の上へ、赤い子供の四人が出て、きちんと並ぶと、緋の法衣（ころも）の脊高が、枯れた杉の木の揺（ゆら）ぐごとく、すくすくと通るに従って、一列に直って、裏の山へ、夏草の径（こみち）を縫って行（ゆ）く――この時だ。一番あとのずんぐり童子が、銃を荷（にな）った嬉しさだろう、真赤な大（おおき）な臀（しり）を、むくむくと振って、肩で踊って、

「わあい。」
と馬鹿調子のどら声を放す。
ひょろ長い美少年が、
「おうい。」
と途轍(とてつ)もない奇声を揚げた。
同時に、うしろ向きの赤い袖が飜(ひるがえ)って、頭目は掌(てのひら)を口に当てた、声を圧(おさ)えたのではない、笛を含んだらしい。ヒュウ、ヒュウと響くと、たちまち静(しず)かに、粛々として続いて行(ゆ)く。
すぐに、山の根に取着いた。が草深い雑木の根を、縦に貫く一列は、殿(しんがり)の尾の、ずんぐり、ぶつりとし

た大赤棟蛇が畝るようで、あのヘルメットが鎌首によく似ている。

見る間に、山腹の真黒な一叢の竹藪を潜って隠れた時、

「やーい。」

「おーい。」

ヒュウ、ヒュウと幽に聞こえた。なぜか、その笛に魅せられて、少年等が、別の世、別の都、別の町、あやしきかくれ里へ攫われて行きそうで、悪酒に酔ったように、凡杯の胸は塞った。

自動車たるべきものが、スピイドを何とした。

茫然(ぼうぜん)とした状(さま)して、運転手が、汚れた手袋の指の破れたのを凝(じっ)と視(み)ている。――掌に、銀貨が五六枚、キラキラと光ったのであった。

「――お爺さん、何だろうね。」

「…………」

「私も、運転手も、現に見たんだが。」

「さればなす……」

と、爺さんは、粉煙草(こなたばこ)を、三度ばかりに火皿の大きなのに撮(つま)み入れた。

……根太の抜けた、荒寺の庫裡(くり)に、炉の縁で。……

三

西明寺（さいみょうじ）――もとこの寺は、松平氏が旧領石州から奉搬の伝来で、土地の町村に檀家（だんか）がない。従って盆暮のつけ届け、早い話がおとむらい一つない。如法（にょほう）の貧地で、堂も庫裡も荒れ放題。いずれ旧藩中ばかりの石碑だが、苔（こけ）を剝（む）かねば、紋も分らぬ。その墓地の図面と、過去帳は、和尚が大切にしているが、あいにく留守。

……

墓参のよしを聴いて爺さんが言ったのである。

「ほか寺の仏事の手伝いやら托鉢やらで、こちとら同様、細い煙を立てていなさるでなす。」

あいにく留守だが、そこは雲水、風の加減で、ふわりと帰る事もあろう。

「まあ一服さっせえまし、和尚様とは親類づきあい、渋茶をいれて進ぜますで。」

とにかく、いい人に逢った。爺さんは、旧藩士ででもあんなさるかと聞くと、

「孫八とこいて、いやはや、若い時から、やくざでがしての。縁は異なもの、はッはッはッ。お前様、曾祖父様や、祖父様の背戸畑で、落穂を拾った事もあ

んべい。——鼠棚（ねずみだな）捜いて麦こがしでも進ぜますだ。」
ともなわれて庫裡に居る（お）——奥州片原の土地の名も、この荒寺では、鼠棚がふさわしい。いたずらものが勝手に出入り（ではい）をしそうな虫くい棚の上に、さっきから古木魚が一つあった。音も、形も馴染（なじみ）のものだが、仏具だから、俗家の小県は幼いいたずら時にもまだ持って見たことがない。手頃なのは大抵想像は付くけれども、かこみほとんど二尺、これだけの大きさだと、どのくらい重量（めかた）があろうか。普通は、本堂に、香華（こうげ）の花と、香の匂（におい）と明滅する処に、章魚胡坐（たこあぐら）で構えていて、おどかして言えば、海坊主の坐禅のごとし。……辻の地蔵

尊の涎掛（よだれかけ）をはぎ合わせたような蒲団（ふとん）が敷いてある。ところを、大木魚の下に、ヒヤリと目に涼しい、薄色の、一目見て紛（まが）う方なき女持ちの提紙入（ハンドバック）で。白い桔梗（ききょう）と、水紅色（ときいろ）の常夏（とこなつ）、と思ったのが、その二色（ふたいろ）の、花の鉄線かずらを刺繍（ししゅう）した、銀座むきの至極当世な持もので、花はきりりとしているが、葉も蔓（つる）も弱々しく、中のものも角ばらず、なよなよと、木魚の下すべりに、優しい女の、帯の端を引伏せられたように見えるのであった。

はじめ小県が、ここの崖を、墓地へ下りる以前に、寺の庫裡を覗（のぞ）いた時、人気（ひとけ）も、火の気もない、炉の傍（そば）

に一段高く破れ落ちた壁の穴の前に、この帯らしいものを見つけて、うつくしい女の、その腰は、袖は、あらわな白い肩は、壁外に逆（さかさ）になって、蜘蛛（くも）の巣がらみに、蒼白（あおじろ）くくくられてでもいそうに思った。

瞬間の幻視である。手提（てさげ）はすぐ分った。が、この荒寺、思いのほか、陰寂な無人（ぶじん）の僻地（へきち）で——頼もう——を我が耳で聞返したほどであったから。……

私の隣の松さんは、熊野へ参ると、髪結（ゆ）うて、

熊野の道で日が暮れて、
あと見りゃ怖（おそろ）しい、先見りゃこわい。
先の河原で宿取ろか、跡の河原で宿取ろか。

さきの河原で宿取って、鯰（なまず）が出て、押えて、
手で取りゃ可愛いし、足で取りゃ可愛いし、
杓子（しゃくし）ですくうて、線香（せんこ）で担（にな）って、燈心で括（くく）って、
仏様のうしろで、一切食（ひときれ）や、うまし、二切食や、うまし……

紀州の毬唄（まりうた）で、隠微な残虐（ざんぎゃく）の暗示がある。むかし、熊野詣（もうで）の山道に行暮れて、古寺に宿を借りた、若い娘が燈心で括って線香で担って、鯰を食べたのではない。鯰の方が若い娘を、……あとは言わずとも可（よ）かろう。例証は、遠く、今昔物語、詣鳥部寺女の語（はなし）にある、と

小県はかねて聞いていた。

紀州を尋ねるまでもなかろう。

……今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に
　抱きとめられて、
　高い縁から突落されて、笄落し、小枕落し
　……

古寺の光景は、異様な衝動で渠を打った。

普通、草双紙なり、読本なり、現代一種の伝奇においても、かかる場合には、たまたま来って、騎士がかの女を救うべきである。が、こしらえものより毬唄の方が、現実を曝露して、――女は速に虐げられてい

るらしい。

同時に、愛惜(あいじゃく)の念に堪えない。ものあわれな女が、一切食われ一切食われ、木魚に圧(おさ)え挫(ひし)がれた、……その手提に見入っていたが、腹のすいた狼(おおかみ)のように庫裡へ首を突込(つっこ)んでいて可(い)いものか。何となく、心ゆかしに持っていた折鞄(おりかばん)を、縁側ずれに炉の方へ押入れた。それから、卵塔の草を分けたのであった。――一つは、鞄を提げて墓詣(はかまいり)をするのは、事務を扱うようで気がさしたからであった。

今もある。……木魚の下に、そのままの涼しい夏草と、ちょろはげの鞄とを見較(みくら)べながら、

「――またその何ですよ。……待っていられては気忙(きぜわ)しいから、帰りは帰りとして、自然、それまでに他(ほか)の客がなかったらお世話になろう。――どうせ隙(ひま)だからいつまでも待とうと云うのを――そういってね、一旦(いったん)運転手に分れた――こっちの町尽頭(はずれ)の、茶店……酒場(バア)か。……ざっとまあ、饂飩屋(うどんや)だ。それからは、見た目にも道わるで、無理に自動車を通した処で、歩行(ある)くより難儀らしいから下りたんですがね――饂飩酒場(うどんバア)の女給も、女房(かみ)さんらしいのも――その赤い一行は、さあ、何だか分らない、と言う。しかし、お小姓に、太刀のように鉄砲を持たしていれば、大将様だ。大方、魔も

のか、変化にでも挨拶に行くのだろう、と言うんです。魔ものだの、変化だのに、挨拶は変だ、と思ったが、あとで気がつくと、女連は、うわさのある怪しいことに、恐しく怯えていて、陰でも、退治るの、生捉るのとは言い憚ったものらしい。がまあ、この辺にそんなものが居るのかね。……運転手は笑っていたが、私は真面目さ。何でも、この山奥に大沼というのがある？……ありますか、お爺さん。」

「あるだ。」

その時、この気軽そうな爺さんが、重たく点頭した。

「……阿武隈川が近いによって、阿武沼と、勿体つけ

るで、国々で名高い、湖や、潟ほど、大いなものではねえだがなす、むかしから、それを逢魔沼(おうまぬま)と云うほどでの、樹木が森々(しんしん)として凄(すご)いでや、めったに人が行がねえもんだで、山奥々々というだがね。」

と額を暗く俯向(うつむ)いた。が、煙管(きせる)を落して、門――いや、門も何もない、前通りの草の径(こみち)を、向うの原越しに、差覗(さしのぞ)くがごとく、指をさし、

「あの山を一つ背後(うしろ)へ越した処だで、沢山(たんと)遠い処ではねえが。」

と言う。

その向う山の頂に、杉檜(ひのき)の森に包まれた、堂、社(やしろ)

らしい一地がある。

「……途中でも、気が着いたが。」

水の影でも映りそうに、その空なる樹の間は水色に澄んで青い。

「沼は、あの奥に当るのかね。」

「えへい、まあ、その辺の見当ずら。」

と、掌をもじゃもじゃと振るのが、枯葉が乱れて、その頂の森を掻乱すように見え、

「何かね、その赤い化もの……」

「赤いのが化けものじゃあない――お爺さん。」

「はあ、そうけえ。」

と妙に気の抜けた返事をする。

「……だから、私が――じゃあ、その阿武沼、逢魔沼か。そこへ、あの連中は行ったんだろうか、沼には変った……何か、可恐い、可怪い事でもあるのかね。饂飩酒場の女房が、いいえ、沼には牛鬼が居るとも、大蛇が出るとも、そんな風説は近頃では聞きませんが、いやな事は、このさきの街道――畷の中にあった、というんだよ。寺の前を通る道は、古い水戸街道なんだそうだね。」

「はあ、そうでなす。」

「ぬかるみを目の前にして……さあ、出掛けよう。で、

ここへ私が来る道だ。何が出ようとこの真昼間、気にはしないが、もの好きに、どんな可恐い事があったと聞くと、女給と顔を見合わせてね、旦那、殿方には何でもないよ。アハハハと笑って、陽気に怯かす……その、その辺を女が通ると、ひとりでに押孕む……」

「馬鹿あこけ、あいつ等。」

と額にびくびくと皺を刻み、瘦腕を突張って、爺は、彫刻のように堅くなったが、

「あッはッはッ。」

唐突に笑出した。

「あッはッはッ。」

たちまち口にふたをして、
「ここは噴出す処でねえ。麦こがしが消飛(けしと)ぶでや、お前様もやらっせえ、和尚様の塩加減が出来とるで。」
欠茶碗にもりつけた麦こがしを、しきりに前刻(さっき)から、たばせた。が、匙(さじ)は附木(つけぎ)の燃(もえ)さしである。
「ええ塩梅(あんばい)だ。さあ、やらっせえ、さ。」
掻(か)い候え、と言うのである。これを思うと、木曾殿の、掻食わせた無塩(ぶえん)の平茸(ひらたけ)は、碧澗(へきかん)の羹(あつもの)であろう。が、爺さんの竈禿(くどはげ)の針白髪(はりしらが)は、阿倍の遺臣の概(がい)があった。
「お前様の前だがの、女が通ると、ひとりで孕むなぞ

と、うそにも女の身になったらどうだんべいなす、聞かねえ分で居さっせえまし。優しげな、情合の深い、旦那、お前様だ。」

「いや、恥かしい、情があるの、何のと言って。墓詣りは、誰でもする。」

「いや、それぱかりではねえ。――知っとるだ。お前様は人間扱いに、畜類にものを言わしったろ。」

「畜類に。」

「おお、鷺によ。」

「鷺に。」

「白鷺に。畷さ来る途中でよ。」

「ああ、知ってるのかい、それはどうも。」

## 四

——きみ、きみ——

白鷺に向って声を掛けた。

「人に聞かれたのでは極りが悪いね……」

西明寺を志して来る途中、一処、道端の低い畝に、一叢の緋牡丹が、薄曇る日に燃ゆるがごとく、二輪咲いて、枝の蕾の、撓なのを見た。——奥路に名高い、例の須賀川の牡丹園の花の香が風に伝わるせいかも知

れない、汽車から視める、目の下に近い、門、背戸、垣根。遠くは山裾にかくれてた茅屋にも、咲昇る葵を凌いで牡丹を高く見たのであった。が、こんなに心易い処に咲いたのには逢わなかった。またどこにもあるまい。細竹一節の囲もない、酔える艶婦の裸身である。

旅の袖を、直ちに蝶の翼に開いて——狐が憑いたと人さえ見なければ——もっとも四辺に人影もなかったが——ふわりと飛んで、花を吸おうとも、蕊を抱こうとも、心のままに思われた。

それだのに、十歩……いや、もっと十間ばかり隔たっ

た処に、銑吉が立停（たちど）まったのは、花の莟を、蓑毛（みのけ）に被（かつ）いだ、舞の烏帽子（えぼし）のように翳（かざ）して、葉の裏すく水の影に、白鷺が一羽、婀娜（あだ）に、すっきりと羽を休めていたからである。

ここに一筋の小川が流れる。三尺ばかり、細いが水は清く澄み、瀬は立ちながら、悠揚として、さらさらと聞くほどの音もしない。山入（やまいり）の水源は深く沈んだ池沼（ちしょう）であろう。湖と言い、滝と聞けば、末の流（ながれ）のかくまで静（しずか）なことはあるまいと思う。たとい地理にしていかなりとも。

――松島の道では、鼓草（たんぽぽ）をつむ道草をも、溝を跨（また）い

で越えたと思う。ここの水は、牡丹の叢のうしろを流れて、山の根に添って荒れた麦畑の前を行き、一方は、角ぐむ蘆、茅の芽の漂う水田であった。

道を挟んで、牡丹と相向う処に、亜鉛と柿の継はぎなのが、ともに腐れ、屋根が落ち、柱の倒れた、以前掛茶屋か、中食であったらしい伏屋の残骸が、蓬の裡にのめっていた。あるいは、足休めの客の愛想に、道の対う側を花畑にしていたものかも知れない。流転のあとと、栄花の夢、軒は枯骨のごとく朽ちて、牡丹の膚は鮮紅である。

古蓑が案山子になれば、茶店の骸骨も花守をしてい

よう。煙は立たぬが、根太を埋めた夏草の露は乾かぬ。その草の中を、あたかも、ひらひら、と、ものの現(うつつ)のように、いま生れたらしい蜻蛉(とんぼ)が、群青(ぐんじょう)の絹糸に、薄浅葱(うすあさぎ)の結び玉を目にして、綾の白銀(しろがね)の羅(うすもの)を翼に縫い、ひらひら、と流(ながれ)の方へ、葉うつりを低くして、牡丹に誘われたように、道を伝った。

またあまりに儚(はかな)い。土に映る影もない。が、その影でさえ、触ったら、毒気でたちまち落ちたろう。――

――畷道(なわてみち)の真中(まんなか)に、別に、凄(すさま)じい虫が居た。

しかも、こっちを、銑吉の方を向いて、髯(ひげ)をぴちぴちと動かす。一疋七八分にして、躯(み)は寸に足りない。

けれども、羽に碧緑の艶濃く、赤と黄の斑を飾って、腹に光のある虫だから、留った土が砥になって、磨いたように燦然とする。葛上亭長、芫青、地胆、三種合わせた、猛毒、膚に粟すべき斑蝥の中の、最も普通な、みちおしえ、魔の憑いた宝石のように、炫燿と招いていた。

「――こっちを襲って来るのではない。そこは自然の配剤だね。人が進めば、ひょいと五六尺退って、そこで、また、おいでおいでをしているんだ。碧緑赤黄の色で誘うのか知らん。」

蜻蛉では勿論ない。それを狙っているらしい。白鷺

が、翼を開くまでもなかった。牡丹の花の影を、きれいな水から、すっと出て、斑蝥の前へ行くと思うと、約束通り、前途へ退った。人間に対すると、その挙動は同一らしい。……白鷺が再び、すっと進む。

あの歩の運びは、小股がきれて、意気に見える。斑蝥は、また飛びしさった。白鷺が道の中を。……

――きみ、――きみ――

「うっかり声を出して呼んだんだよ、つい。……毒虫だ、大毒だ。きみ、啣えてはいけないと。あの毒は大変です、その卵のくッついた野菜を食べると、血を吐いて即死だそうだ。

現に、私がね、ただ、触られてかぶれたばかりだが。

北国(ほっこく)の秋の祭——十月です。半ば頃、その祭に呼ばれて親類へ行った。

白山宮(はくさんぐう)の境内、大きな手水鉢(ちょうずばち)のわきで、人ごみの中だったが、山の方から、颯(さっ)と虫が来て頰へとまった。指のさきで払い落したあとが、むずむずと痒(かゆ)いんだね。

御手洗(みたらし)は清くて冷い、すぐ洗えばだったけれども、神様の助けです。手も清め、口もそそぐ。……あの手をいきなり突込(つっこ)んだらどのくらい人を損(そこな)ったろう。——たとい殺さないまでもと思うと、今でも身の毛が立つほどだ。ほてって、顔が二つになったほど幅った

く重い。やあ、獅子のような面だ、鬼の面だ、と小児たちに囃されて、泣いたり怒ったり。それでも遊びにほうけていると、清らかな、上品な、お神巫かと思う、色の白い、紅の袴のお嬢さんが、祭の露店に売っている……山葡萄の、黒いほどな紫の実を下すって――お帰んなさい、水で冷すのですよ。

――で、駆戻ると、さきの親類では吃驚して、頭を冷して寝かしたんだがね。客が揃って、おやじ……私の父が来たので、御馳走の膳の並んだ隣へ出て坐った処、そこらを視て、しばらくして、内の小僧は？……と聞くんだね。袖の中の子が分らないほど、面が鬼に

なっていたんです。おやじの顔色が変ると、私も泣出した。あとをよくは覚えていないんだが、その山葡萄を雫（しずく）にして、塗ったり吸ったりして無事に治った……虫は斑蝥だった事はいうまでもないのです。」

「何と、はあ、おっかねえもんだ、なす。知らねえ虫じゃねえでがすが、……もっとも、あの、みちおしえは、誰も触らねえ事にしてあるにはあるだよ。」

「だから、つい、声も掛けようではないか。」

「鷺の鳥はどうしただね。」

「お爺さん、それは見ていなかったかい。」

「なまけもんだ、陽気のよさに、あとはすぐとろとろ

だ。あの潰屋（つぶれや）の陰に寝ころばっておったもんだでの。」

白鷺はやがて羽を開いた。飛ぶと、宙を翔（かけ）る威力には、とび退（しさ）る虫が嘴（くちばし）に消えた。雪の蓑毛（みのけ）を爽（さわやか）に、もとの流（ながれ）の上に帰ったのは、あと口に水を含んだのであろうも知れない。諸羽（もろはね）を搏（う）つと、ひらりと舞上る時、緋牡丹の花の影が、雪の頸（うなじ）に、ぼっと沁（し）みて薄紅（うすくれない）がさした。そのまま山の端（は）を、高く森の梢（こずえ）にかくれたのであった。

「あの様子では確（たしか）に呑んだよ、どうも殺（や）られたろうと思うがね。」

爺（じい）は股引（ももひき）の膝を居直って、自信がありそうに云った。

「うんや、鳥は悧巧（りこう）だで。」
「悧巧な鳥でも、殺生石には斃（おち）るじゃないか。」
「うんや、大丈夫でがすべよ。」
「が、見る見るあの白い咽喉（のど）の赤くなったのが可恐（おそろし）いよ。」
「とろりと旨（うま）いと酔うがなす。」
にたにたと笑いながら、
「麦こがしでは駄目だがなす。」
「しかし……」
「お前様、それにの、鷺はの、明神様のおつかわしめだよ、白鷺明神というだでね。」

「ああ、そうか、あの向うの山のお堂だね。」
「余り人の行く処でねえでね。道も大儀だ。」
と、なぜか中を隔てるように、さし覗く小県の目の前で、頭を振った。
明神の森というと——あの白鷺はその梢へ飛んだ——
——なぜか爺が、まだ誰も詣でようとも言わぬものを、悪く遮りだてするらしいのに、反感を持つとまでもなかったけれども、すぐにも出掛けたい気が起った。黒塚の婆の納戸で、止むを得ない。
「——時に、和尚さんは、まだなかなか帰りそうに見えないね。とすると、位牌も過去帳も分らない。……」

「何しろ、この荒寺だ、和尚は出がちだよって、大切な物だけは、はい、町の在家の確かな蔵に預けてあるで。」

「また帰途(かえり)に寄るとしよう。」

不意に立掛けた。が、見掛けた目にも、若い綺麗(きれい)な人の持ものらしい提紙入(ハンドバック)に心を曳(ひ)かれた。またそれだけ、露骨に聞くのが擽(くすぐ)ったかったのを、ここで銑吉が棄鞭(すてむち)を打った。

「お爺さん、お寺には、おかみさん、いや、奥さんか。」

小さな声で、

「おだいこくがおいでかね。」

「は、とんでもねえ、それどころか、檀那(だんな)がねえで、亡者も居ねえ。だがな、またこの和尚が世棄人過ぎた、あんまり悟りすぎた。参詣の女衆(おなごしゅ)が、忘れたればとって、預けたればとって、あんだ、あれは。」

と、せきこんで、

「……外廻りをするにして、要心に事を欠いた。木魚を圧(おし)に置くとは何(あん)たるこんだ。」

と、やけに突立(つった)つ膝がしらに、麦こがしの椀を炉の中へ突込(つっこ)んで、ぱっと立つ白い粉に、クシンと咽(む)せたは可笑(おかし)いが、手向(たむけ)の水の涸(か)れたようで、見る目には、ものあわれ。

もくりと、搔落すように大木魚を膝に取って、

「ぼっかり押孕（おっぱら）んだ、しかも大（でっか）い、木魚講を見せつけられて、どんなにか、はい、女衆は恥かしかんべい。」

その時、提紙入（ハンドバック）の色が、紫陽花（あじさい）の浅葱（あさぎ）淡く、壁の暗さに、黒髪も乱れつつ、産婦の顔の萎（しお）れたように見えたのである。

谷間の卵塔に、田沢氏の墓のただ一基苔（こけ）の払われた、それを思え。

「お爺さん、では、あの女の持ものは、お産で死んだ記念（かたみ）の納（おさめ）ものででもあるのかい。」

べそかくばかりに眉を寄せて、

「牡丹に立った白鷺になるよりも、人間は娑婆が恋しかんべいに、産で死んで、姑獲鳥になるわ。びしょびしょ降の闇暗に、若い女が青ざめて、腰の下さ血だらけで、あのこわれ屋の軒の上へ。……わあ、情ない。……お救い下され、南無普門品、第二十五。」

と炉縁をずり直って、たとえば、小県に股引の尻を見せ、向うむきに円く踞ったが、古寺の狸などを論ずべき場合でない——およそ、その背中ほどの木魚にしがみついて、もく、もく、もく、もく、と立てつけに鳴らしながら、

「南無普門品第二十五。」

「普門品第二十五。」
小県も、ともに口の裡(うち)で。
「この寺に観世音。」
「ああ居らっしゃるとも、難有(ありがた)い、ありがたい……」
「その本堂に。」
「いや、あちらの棟だ。――ああ、参らっしゃるか。」
「参ろうとも。」
「おお、いい事だ、さあ、ござい、ござい。」
と抱込んだ木魚を、もく、もくと敲(たた)きながら、足腰の頑丈づくりがひよこひよこと前(さき)へ立った。この爺さん、どうかしている。

が、導かれて、御厨子の前へ進んでからは——そういう小県が、かえって、どうかしないではいられなくなったのである。

この庫裡と、わずかに二棟、隔ての戸もない本堂は、置棚の真中に、名号を掛けたばかりで、その外の横縁に、それでも形ばかり階段が残った。以前は橋廊下で渡ったらしいが、床板の折れ挫げたのを継合せに土に敷いてある。

明神の森が右の峰、左に、卵塔場を谷に見て、よく一人で、と思うばかり、前刻彳んだ、田沢氏の墓はその谷の草がくれ。

向うの階(きざはし)を、木魚が上(あが)る。あとへ続くと、須弥壇(しゅみだん)も仏具も何もない。白布を蔽(おお)うた台に、経机を据えて、その上に黒塗の御廚子があった。

庫裡の炉の周囲(まわり)は筵(むしろ)である。ここだけ畳を三畳ほどに、賽銭(さいせん)の箱が小さく据(すわ)って、花瓶(はながめ)に雪を装(も)った一束の卯(う)の花が露を含んで清々(すがすが)しい。根じめともない、三本ほどのチュリップも、蓮華(れんげ)の水を抽(ぬき)んでた風情があった。

勿体ないが、その卯の花の房々したのが、おのずから押になって、御廚子の片扉を支えたばかり、片扉は、鎧(よろい)の袖の断(たた)れたように摺(ず)れ下っていたのだから。

「は、」
ただ伏拝むと、斜に差覗かせたまうお姿は、御丈八寸、雪なす卯の花に袖のひだが靡く。白木一彫、群青の御髪にして、一点の朱の唇、打微笑みつつ、爺を、銑吉を、見そなわす。
「南無普門品第二十五。」
「失礼だけれど、准胝観音でいらっしゃるね。」
「はあい、そうでがすべ。和尚どのが、覚えにくい名を称えさっしゃる。南無普門品第二十五。」
よし、ただ、南無とばかり称え申せ、ここにおわするは、除災、延命、求児の誓願、擁護愛愍の菩薩であ

る。
「お爺さん、ああ、それに、生意気をいうようだけれど、これは素晴らしい名作です。私は知らないが、友達に大分出来る彫刻家があるので、門前の小僧だ。少し分る……それに、よっぽど時代が古い。」
「和尚に聞かして下っせえ、どないにか喜びますべい、もっとも前藩主（せんとのさま）が、石州からお守りしてござったとは聞いとりますがの。」
と及腰（およびごし）に覗（のぞ）いていた。
お蠟燭（ろうそく）を、というと、爺が庫裡へ調達に急いだ——
ここで濫（みだり）に火あつかいをさせない注意はもっともな

事である——

「たしかに宝物。」

憚(はばか)り多いが、霊容の、今度は、作を見ようとして、御厨子に寄せた目に、ふと卯の花の白い奥に、ものを忍ばすようにして、供物をした、二つ折の懐紙を視(み)た。備えたのはビスケットである。これはいささか稚気を帯びた。が、にれぜん河(が)のほとり、菩提樹(ぼだいじゅ)の蔭に、釈尊にはじめて捧げたものは何であろう。菩薩の壇にビスケットも、あるいは臘八(ろうはち)の粥(かゆ)に増(まさ)ろうも知れない。しかしこれを供えた白い手首は、野暮なレエスから出たらしい。勿論だ。意気なばかりが女でない。同時に

芬と、媚かしい白粉の薫がした。

爺が居て気がつかなかったか。木魚を置いたわきに、三宝が据って、上に、ここがもし閻魔堂だと、女人を解いた生血と膩肉に紛うであろう、生々と、滑かな、紅白の巻いた絹。

「ああ、誓願のその一、求児――子育、子安の観世音として、ここに婦人の参詣がある。」

世に、参り合わせた時の順に、白は男、紅は女の子を授けらるる……と信仰する、観世音のたまう腹帯である。

その三宝の端に、薄色の、折目の細い、女扇が、忘

れたように載っていた。

正面の格子も閉され、人は誰も居ない……そっと取ると、骨が水晶のように手に冷(ひや)りとした。卯の花の影が、ちらちらと砂子を散らして、絵も模様も目には留まらぬさきに——せい……せい、と書いた女文字。

今度は、覚えず瞼(まぶた)が染まった。

銑吉には、何を秘(かく)そう、おなじ名の恋人があったのである。

## 五

作者は、小県銑吉の話すまま、つい釣込まれて、恋人——と受次いだが、大切な処だ。念のため断るが、銑吉には、はやく女房がある。しかり、女房があって資産がない。女房もちの銭（ぜに）なしが当世色恋の出来ない事は、昔といえども実はあまりかわりはない。打あけて言えば、渠（かれ）はただ自分勝手に、惚（ほ）れているばかりなのである。

また、近頃の色恋は、銀座であろうが、浅草であろうが、山の手新宿のあたりであろうが、つつしみが浅く、たしなみが薄くなり、次第に面の皮が厚くなり、恥が少くなったから、惚れたというのに憚（はばか）ることだ

けは、まずもってないらしい。
釣の道でも（岡）と称(な)がつくと軽(かろ)んぜられる。銑吉のも、しかもその岡惚れである。その癖、夥間(なかま)で評判である。
この岡惚れの対象となって、江戸育ちだというから、海津か卵であろう、築地辺の川端で迷惑をするのがお誓さんで——実は梅水という牛屋の女中(ねえ)さん。……御新規お一人様、なまで御酒(ごしゅ)……待った、待った。そ、そんなのじゃ決してない。第一、お客に、むらさきだの、鍋下(なべした)だのと、符帳でものを食うような、そんなのも決して無い。

梅水は、以前築地一流の本懐石、江戸前の料理人が庖丁を鏽(さ)びさせない腕を研(みが)いて、吸ものの運びにも女中の裙(すそ)さばきを睨(にら)んだ割烹(かっぽう)。震災後も引続き、黒塀の奥深く、竹も樹も静まり返って客を受けたが、近代のある世態では、篝火船(かがりぶね)の白魚より、舶来の塩鰯(しおいわし)が幅をする。正月飾りに、魚河岸に三個(みッつ)よりなかったという二尺六寸の海老(えび)を、緋縅(ひおどし)の鎧(よろい)のごとく、黒松の樽に縅した一騎駈(がけ)の商売では軍(いくさ)が危い。家の業が立ちにくい。がらりと気を替えて、こうべ肉のすき焼、ばた焼、お望み次第に客を呼んで、抱一(ほういつ)上人の夕顔を石燈籠(いしどうろう)の灯でほの見せる数寄屋(すきや)づくりも、七賢人の本床に立っ

た、松林の大広間も、そのままで、びんちょうの火を堆(うずたか)く、ひれの膏(あぶら)を煮(に)る。

この梅水のお誓は、内の子、娘分であるという。来たのは十三で、震災の時は十四であった。繰返していうでもあるまい——あの炎の中を、主人の家(うち)を離れないで、勤め続けた。もっとも孤児(みなしご)同然だとのこと、都にしかるべき身内もない。そのせいか、沈んだ陰気な質(たち)ではないが、色の、抜けるほど白いのに、どこか寂しい影が映る。膚(はだ)をいえば、きめが細(こま)かく、実際、手首、指の尖(さき)まで化粧をしたように滑らかに美しい。細面で、目は、ぱっちりと、大きくないが張(はり)があって、そして

眉が優しい。緊(しま)った口許(くちもと)が、莞爾(にっこり)する時ちょっとうけ口のようになって、その清い唇の左へ軽く上るのが、笑顔ながら凛(りん)とする。総てが薄手で、あり余る髪の厚ぼったく見えないのは、癖がなく、細く、なよなよとしているのである。緋(ひ)も紅も似合うものを、浅葱だの、白の手絡(てがら)だの、いつも淡泊(あっさり)した円髷(まるまげ)で、年紀(とし)は三十を一つ出た。が、二十四五の上には見えない。一度五月の節句に、催しの仮装の時、水髪の芸子島田に、青い新藁(しんわら)で、五尺の菖蒲(あやめ)の 裳(もすそ)を曳(ひ)いた姿を見たものがある、と聞く。……貴殿はいい月日の下に生れたな、と言わねばならぬように思う。あるいは一度新橋からお酌で

出たのが、都合で、梅水にかわったともいうが、いまにおいては審（つまびらか）でない。ただ不思議なのは、さばかりの容色（きりょう）で、その年まで、いまだ浮気、あらわに言えば、旦那があったうわさを聞かぬ。ほかは知らない、あのすなおな細い鼻と、口許がうそを言わぬ。——お誓さんは処女だろう……（しばらく）——これは小県銑吉の言うところである。

　十六か七の時、ただ一度——場所は築地だ、家は懐石、人も多いに、台所から出入りの牛乳屋（ちちや）の小僧が附ぶみをした事のあるのを、最も古くから、お誓を贔屓（ひいき）の年配者、あたまのきれいに兀（は）げた粋人が知っている。

梅水の主人夫婦も、座興のように話をする。ゆらの戸の歌ではなけれど、この恋の行方は分らない。が、対手（あいて）が牛乳屋の小僧だけに、天使と牧童のお伽話（とぎばなし）を聞く気がする。ただその玉章（たまずさ）は、お誓の内証（ないしょ）の針箱にいまも秘めてあるらしい。……

「……一生の願（ねがい）に、見たいものですな。」

「お見せしましょうか。」

「恐らく不老長寿の薬になる——近頃はやる、性の補強剤に効能の増（まさ）ること万々だろう。」

「そうでしょうか。」

その頬が、白く、涼しい。

「見せろよ。」
低い声の澄んだ調子で、
「ほほほ。」
と莞爾(にっこり)。
その口許の左へ軽くしまるのを見るがいい。……座敷へ持出さないことは言うまでもない。

色気の有無(ほど)が不可解である。ある種のうつくしいものは、神が惜(おし)んで人に与えない説がある。なるほどそういえば、一方円満柔和な婦人に、菩薩相(ぼさつそう)というのがある。続いて尼僧顔がないでもあるまい。それに対して、お誓の処女づくって、血の清澄明晰(せいしょうめいせき)な風情に、何

となく上等の神巫（みこ）の麗女（たおやめ）の面影が立つ。
——われ知らず、銑吉のかくれた意識に、おのずから、毒虫の毒から救われた、うつくしい神巫（おみこ）の影が映るのであろう。——

おお美わしのおとめよ、と賽銭（さいせん）に、二百金、現に三百金ほどを包んで、袖に呈（てい）するものさえある。が、お誓はいつも、そのままお帳場へ持って下って、おかみさんの前で、こんなもの。すぐ、おかみさんが、つッと出て、お給仕料は、お極（きま）りだけ御勘定の中に頂いてありますから。……これでは、玉の手を握ろう、紅（もみ）の袴（はかま）を引こうと、乗出し、泳上る自信の輩（やから）の頭（こうべ）を、

幣結（しでゆ）うた榊（さかき）をもって、そのあしきを払うようなものである。

いわんや、銑吉のごとき、お月掛なみの氏子（うじこ）をや。

その志を、あわれむ男が、いくらか思（おもい）を通わせてやろうという気で。……

「小県の惚れ方は大変だよ。」

「…………」

「嬉しいだろう。」

「ええ。」

目で、ツンと澄まして、うけ口をちょっとしめて、

莞爾（にっこり）……

「嬉しいですわ。」

しかも、銑吉が同座で居た。

余計な事だが――一説がある。お誓はうまれが東京だというのに「嬉しいですわ。」は、おかしい。この言葉づかいは、銀座あるきの紳士、学生、もっぱら映画の弁士などが、わざと粋がって「避暑に行ったてです。」「アルプスへ上るです。」と使用するが、元来は訛(なまり)である。恋われて――いやな言葉づかいだが――挨拶(あいさつ)をするのに、「嬉しいですわ。」は、嬉しくない、と言うのである。

紳士、学生、あえて映画の弁士とは限らない。梅水

の主人は趣味が遍(あまね)く、客が八方に広いから、多方面の芸術家、画家、彫刻家、医、文、法、理工の学士、博士、俳優、いずれの道にも、知名の人物が少くない。揃った事は、婦人科、小児科、歯科もある。申しおくれました、作家、劇作家も勿論ある。そこで、この面々が、年齢の老若にかかわらず、東京ばかりではない。のみならず、ことさらに、江戸がるのを毛嫌いして「そうです。」「のむです。」を行(や)る名士が少くない。純情無垢(むく)な素質であるほど、ついその訛(なまり)がお誓にうつる。

浅草寺の天井の絵の天人が、蓮華の盥(たらい)で、肌脱ぎの化粧をしながら、「こウ雲助どう、こんたア、きょう下

界へでさっしゃるなら、京橋の仙女香を、とって来ておくんなんし、これサ乙女や、なによウふざけるのだ、きりきりきょうでえをだしておかねえか。」（〇註に、けわい坂(ざか)──実は吉原──近所だけか、おかしなことばが、うつッていたまう、）と洒(しゃ)落れつつ敬意を表した、著作の実例がある。遺憾(いかん)ながら「嬉しいですわ。」とはかいてない。けれども、その趣はわかると思う。またそれよりも、真珠の首飾見たようなものを、ちょっと、脇の下へずらして、乳首をかくした膚(はだ)を、お望みの方は、文政壬辰(みずのえたつ)新板、柳亭種彦作、歌川国貞画(えがく)──奇妙頂礼(きみょうちょうらい)地蔵の道行──を、ご一覧になるがいい。

通り一遍の客ではなく、梅水の馴染で、昔からの贔屓連が、六七十人、多い時は百人に余る大一座で、すき焼で、心置かず隔てのない月並の会……というと、俳人には禁句らしいが、そこらは凡杯で悟っているから、一向に頓着しない。先輩、また友達に誘われた新参で。……やっと一昨年の秋頃だから、まだ馴染も重ならないのに、のっけから岡惚れした。

「お誓さん。」

「誓ちゃん。」

「よう、誓の字。」

いや、どうも引手あまたで。大連が一台ずつ、黒塗

り真円な大円卓を、ぐるりと輪形に陣取って、清正公には極内だけれども、これを蛇の目の陣と称え、すきを取って平らげること、焼山越の蟒蛇の比にあらず、朝鮮蔚山の敵軍へ、大砲を打込むばかり、油の黒煙を立てる裡で、お誓を呼立つること、矢叫びに相斉しい。名を知らぬものまで、白く咲いて楚々とした花には騒ぐ。

　巨匠にして、超人と称えらるる、ある洋画家が、わが、名によって、お誓をひき寄せ、銑吉を傍にして、

「お誓さんに是非というのだ、この人に酌をしておあげなさい。」

「はい。」

が、また娘分に仕立てられても、奉公人の謙譲があって、出過ぎた酒場(バア)の給仕とは心得が違うし、おなじ勤めでも、芸者より一歩退(さが)って可憐(しおら)しい。

「はい、お酌……」

「感謝します、本懐であります。」

景物なしの地位ぐらいに、句が抜けたほど、嬉しがったうちはいい。

少し心安くなると、蛇の目の陣に恐(おそれ)をなし、山の端(は)の霧に落ちて行く――上臈(じょうろう)のような優姿(やさすがた)に、野声(のごえ)を放って、

「お誓さん、お誓さん。姉さん、姐（あね）ご、大姐ご。」

立てごかしに、手繰りよせると、酔った赤づらの目が、とろんこで、

「お酌を頼む。是非一つ。」

このねだりものの潑猴（わるざる）、魔界の艶夫人に、芭蕉扇を、貸さずば、奪わむ、とする擬勢を顕（あら）わす。……博識にしてお心得のある方々は、この趣を、希臘（ギリシア）、羅馬（ロオマ）の神話、印度の譬諭経（ひゆきょう）にでもお求めありたい。ここでは手近な絵本西遊記で埒（らち）をあける。が、ただ先哲、孫呉空は、蟭螟虫（ごまむし）と変じて、夫人の腹中に飛び込んで、痛快にその臓腑（ぞうふ）を抉（えぐ）るのである。末法の凡俳は、咽喉（のど）まで

も行かない、唇に触れたら酸漿(ほおずき)の核(たね)ともならず、溶(とろ)けちまおう。

ついでに、おかしな話がある。六七人と銑吉がこの近所の名代の天麩羅(てんぷら)で、したたかに食(くら)い且つ飲んで、腹こなしに、ぞろぞろと歩行(あるき)出して、つい梅水の長く続いた黒塀に通りかかった。

盛り場でも燈(ともしび)を沈め、塀の中は植込で森(しん)と暗い。処で、相談を掛けてみたとか、掛けてみるまでもなかったとかいう。……天麩羅のあとで、ヒレの大切れのすき焼は、なかなか、幕下でも、前頭でも、番附か逸話に名の出るほどの人物でなくてはあしらい兼ねる。素

通りをすることになった。遺憾さに、内は広し、座敷は多し、程は遠い……

「お誓さん。」

黒塀を――惚れた女に洋杖(ステッキ)は当てられない――斜(ななめ)に、トンと腕で当てた。当てると、そのまくれた二の腕に、お誓の膚(はだ)が透通って、真白(まっしろ)に見えたというのである。

銑吉の馬鹿を表わすより、これには、お誓の容色の趣を偲(しの)ばせるものがあるであろう。

ざっと、かくの次第であった処――好事魔多しというではなけれど、右の潑猴(わるざる)は、心さわがしく、性急だ

から、人さきに会(あい)に出掛けて、ひとつ蛇の目を取巻くのに、度(たび)かさなるに従って、自然とおなじ顔が集るが、星座のこの分野に当っては、すなわち夜這星(よばいぼし)が真先(まっさき)に出向いて、どこの会でも、大抵点燈頃(ひともしごろ)が寸法であるのに、いつも暮まえ早くから大広間の天井下に、一つ光って……いや、光らずに、ぽつんと黒く、流れている。

　勿論、ここへお誓が、天女の装(よそおい)で、雲に白足袋で出て来るような待遇では決してない。

　その愚劣さを憐(あわれ)んで、この分野の客星たちは、他(ほか)より早く、輝いて顕(あら)われる。輝くばかりで、やがて他の大一座が酒池肉林となっても、ここばかりは、畳に蕨(わらび)

が生えそうに見える。通りかかった女中に催促すると、は、とばかりで、それきり、寄りつかぬ。中でも活潑なのは、お誓さんでなくってはねえ、ビイーと外(そ)れてしまう。またそのお誓はお誓で、まず、ほかほかへ皿小鉢、銚子(ちょうし)を運ぶと、お門(かど)が違いましょう。で、知りませんと、鼻をつまらせ加減に、含羞(はにか)んで、つい、と退(の)くが、そのままでは夜這星の方へ来にくくなって、どこへか隠れる。ついお銚子が遅くなって、巻煙草の吸殻ばかりが堆(うずたか)い。

　何となく、ために気がとがめて、というのが、会が月の末に当るので、懐中(ふところ)勘定によったかも分らぬ。一

度、二度と間を置くうち、去年七月の末から、梅水が……これも近頃各所で行われる……近くは鎌倉、熱海。また軽井沢などへ夏季の出店(でみせ)をする。いやどこも不景気で、大したほまちにはならないそうだけれど、差引一ぱいに行けば、家族が、一夏避暑をする儲けがある。梅水は富士の裾野(すその)——御殿場へ出張した。

そこへ、お誓が手伝いに出向いたと聞いて、がっかりして、峰は白雪、麓(ふもと)は霞だろう、とそのまま夜這星の流れて消えたのが——もう一度いおう——去年の七月の末頃であった。

この、六月——いまに至るまで、それ切り、その消

息を知らなかったのである。
もし梅水の出店をしたのが、近い処は、房総地方、あるいは軽井沢、日光――塩原ならばいうまでもない。地の利によらないことは、それが木曾路でも、ふとすると、こんな処で、どうした拍子、何かの縁で、おなじ人に、逢うまじきものでもない、と思ったろう。仏蘭西(フランス)の港で顔を見たより、瑞西(スウィッツル)の山で出会ったのより、思掛けなさはあまりであったが――ここに古寺の観世音の前に、紅白の絹に添えた扇子(おうぎ)の名は、築地の黒塀を隔てた時のようではない。まのあたりその人に逢ったようで、単衣(ひとえ)の袖も寒いほど、しみじみと、

熟（じっ）と視（み）た。

たちまち、炬（たいまつ）のごとく燃ゆる、おもほてりを激しく感じた。

爺さんが、庫裡（くり）から取って来た、燈明の火が、ちらちらと、

「やあ、見るもんじやねえ。」

その、扇子を引ったくると、

「あなたよ、こんなものを置いとくだ。」

と叱るようにいって、開いたまま、その薄色の扇子で、木魚を伏せた。

極（きま）りも悪いし、叱られたわんぱくが、ふてたように、わざとらしく祝していった。

「上へのっけられたより、扇で木魚を伏せた方が、女が勝ったようで嬉しいよ。」

「勝つも負けるも、女は受身だ。隠すにも隠されましねえ。」

どかりと尻をつくと、鼻をすすって、しくしくと泣出した。

青い煙の細くなびく、蠟燭の香の沁（し）む裡（なか）に、さっきから打ちかさねて、ものの様子が、思わぬかくし事に懐妊（かいにん）したか、また産後か、おせい、といううつくしい

女一人、はかなくなったか、煩ろうて死のうとするか、そのいずれか、とフト胸がせまって、涙ぐんだ目を、たちまち血の電光のごとく射たのは、林間の自動車に闖入(ちんにゅう)した、五体個々にして、しかも畝(うね)り繋(つなが)った赤色の夜叉(やしゃ)である。渠等(かれら)こそ、山を貫き、谷を穿(うが)って、うつくしい犠牲を猟(か)るらん。飛天の銃は、あの、清く美しい白鷺を狙うらしく想わるるとともに、激毒を啣(ふく)んだ霊鳥は、渠等に対していかなる防禦をするであろう、神話のごとき戦は、今日の中(うち)にも開かるるであろう。明神の晴れたる森は、たちまち黒雲に蔽(おお)わるるであろうも知れない。

銑吉は、少からず、猟奇の心に駆られたのである。同時にお誓がうつくしき鳥と、おなじ境遇に置かるるもののように、衝と胸を打たれて、ぞっとした。その時、小枝が揺れて、卯の花が、しろじろと、細く白い手のように、銑吉の膝に縋った。

昭和八（一九三三）年一月

底本：「泉鏡花集成９」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９６（平成８）年６月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十三巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年６月22日発行
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００６年3月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。